

遠藤周作『女の一生 一部・キクの場合』論

——多層的な二項対立の世界——

長 濱 拓 磨

一、「歴史小説」の問題

『女の一生』は、〈一部・キクの場合〉が、一九八〇（昭和五十五）年十一月一日から一九八一（昭和五十六）年七月一日まで「朝日新聞」に連載された。引き続き〈二部・サチ子の場合〉が一九八一（昭和五十六）年七月三日から一九八二（昭和五十七）年二月七日まで連載された。足かけ二年にわたる長期連載の中で、〈一部・キクの場合〉では、浦上四番崩れによって翻弄されたキクの一生を、〈二部・サチ子の場合〉では戦争と原爆によって翻弄されたサチ子の一生を描いている。のち単行本として『女の一生 一部・キクの場合』が一九八二

（昭和五十七）年二月、『女の一生 二部・サチ子の場合』が一九八二（昭和五十七）年三月に朝日新聞社より刊行された。さらには、講談社の『遠藤周作歴史小説集』の一卷として『遠藤周作歴史小説集1 女の一生—キクの場合』が一九九六（平成八）年一月に刊行されている。本稿では「歴史小説」を中心に考察するので〈一部・キクの場合〉のみを対象とする。

拙稿[〔]で分類したが、遠藤の「歴史小説」は三つの時期に区分される。すなわち、第一期「切支丹物」、第二期「評伝」、第三期「歴史群像」である。『女の一生 一部・キクの場合』（以下、『女の一生』と呼ぶ）は、第三期の「歴史群像」に分類される最初の作品である。そのため、

第二期から継承された問題と、第三期から新たに始まる問題の両方を備えている。まず第二期から継承された問題は二人の主人公を配置する二項対立の問題がある。

『メナム河の日本人』、『銃と十字架』、『王国への道―山田長政―』（以下、『王国への道』と呼ぶ）ではアユタヤに地上の王国の建設を目指す山田長政と、神の王国を目指し日本へ戻り殉教した〈ペドロ岐部〉の異なる生き方が対照的に描かれていた。『鉄の首枷―小西行長伝―』では「水の人間」である小西行長を「土の人間」である加藤清正との対比で描き出していた。『侍』でも長谷倉とベラスコという二人の主人公を配置し、それぞれが組織の思惑に翻弄されながら、キリスト教と向かい合い、信仰へ殉じていく姿が描かれた。次に、第三期の新たな問題がある。「歴史群像」である。既に『王国への道』や『侍』でも二人の主人公がそれぞれ組織の中で翻弄される生が描かれてきたが、『女の一生』に始まる第三期ではさらに多元的な視点が展開されている。また、「歴史小説」としても「世界の中の日本」というグローバルな視点を持ち合わせている。そこで、本稿では多層的な

二元論の問題を中心として『女の一生』を考察していくこととする。

二、「語り」の問題

『女の一生』の作品分析をはじめる前に「語り」の問題から考えたい。というのも、『女の一生』の「語り」には司馬遼太郎の影響がいくつか散見されるからである。試みに『坂の上の雲』（初出：『産経新聞（夕刊）』、一九六八・昭和四十三年四月二十二日）と一九七二・昭和四十七年八月四日）と比較してみると次の四つの共通点が浮かび上がる。

(一) 新聞小説

(二) グローバルな視点

(三) 多元的な視点

(四) 〈歴史〉愛好者としての「語り」

以上である。順に考えて行くこととする。

まず「(一)新聞小説」の問題である。『女の一生』は「朝日新聞」に、『坂の上の雲』は「産経新聞（夕刊）」に連載された新聞小説である。その特質上、多種多様な

読者を意識せざるを得ない。〈作者〉(『坂の上の雲』では〈筆者〉)が顔を出し、複雑な歴史背景や場所について解説・説明することなどもその一例である。例えば、『女の一生』では次のような場面に見られる。

もしあなたが偶然、長崎に行かれ、長崎駅から車を原爆落下地点の方に走らせると、国道にそって右側に聖徳寺幼稚園という字を書いた寺がみえる。その一帯がかつての馬込郷である。

〔「ミツとキク」／『女の一生』〕

キクやミツがはじめて訪れた頃の大浦の風景は今とはかなり違っていた。

〔「南蛮寺」／『女の一生』〕

今日、彼等がやっと戻った浦上村には昔日の面影はない。そこは長崎市に入れられて、丘は切りくだかれ、林の木は倒され、住宅地と変わったからである。だが、彼等が帰ってきた頃の浦上は荒れに荒れていた。

〔「エピローグ」／『女の一生』〕

いずれも、作品舞台の今の姿を伝えることで、読者が作品舞台である長崎を想像する手助けとなっている。そのため、『女の一生』の文体について「現代小説の文体」という指摘も見られるほどである。さらに、笛木美佳氏もこうした「語り」の問題に関して次のように述べている。

この〈作者〉が単に出来事の再生をするだけにとどまらず、時空を超え、きめ細やかな配慮のもとに主観的な感想・説明を加えながら語っていくところにこの作品の魅力がある(以下略)

(笛木美佳「『女の一生 一部・キクの場合』論—
雨が語りかけてくるもの—」／「学苑」二〇〇一・
平成十三年一月)

ここで氏が指摘するように『女の一生』の「語り」には「時空を超え、きめ細やかな配慮のもとに主観的な感想・説明を加えながら語っていく」という特徴があるが、これはやはり新聞小説という特質上、様々な年齢層、地域に住む読者を意識したものとと言える。もちろん、これ

らの特徴はそのまま『坂の上の雲』の「語り」にも当てはまる。例えば次のような場面である。

この物語の主人公は、あるいはこの時代の小さな日本ということになるかもしれないが、ともかくもわれわれは三人の人物のあとを追わねばならない。

(傍線部引用者／「春や昔」／『坂の上の雲』)

この兄弟がいなければ日本はどうなっていたかわからないが、そのくせこの兄弟が、どちらも本来が軍人志願でなく、いかにも明治初年の日本的事情から世に出てゆくあたりに、いまのところ筆者はかきりない関心をもっている。

(傍線部引用者／「真之」／『坂の上の雲』)

ここで語り手は「われわれ」「筆者」として作品に顔を出している。〈作者〉が直接顔を出して読者に説明する姿が想定されている。「われわれ」という時、作者と読者が一体化した「語り」であるし、「筆者」という時も、読者に「筆者」の関心を明確に提示するという役割もあつた。そのようにして「主観的な感想・説明を加え

ながら語っていく」のである。

次に「(二)グローバルな視点」の問題である。『女の一生』も『坂の上の雲』も日本の分岐点である明治という時代を「世界の中の日本」というグローバルな観点から鳥瞰的に捉えるという共通点を持っている。『女の一生』では、幕末から明治初めの浦上四番崩れを描いているが、清吉が属する浦上の信徒たちの「浦上村の歴史」^③だけではなく、プチジャン神父が見たフランシスコ・ザビエル以来の日本のキリスト教の歴史や欧米の植民地支配の歴史、さらには本藤舜太郎が岩倉使節団に参加して見たアメリカの対日批判の様子など西洋諸国が日本に影響を与えていくといった世界の動きも視野に入れている。例えば、プチジャン神父は初めて長崎へ赴任した時、数百年にわたる日本の姿に思いを寄せる。

三味線、読経の声、更に街の至るところからひびいてくる無数の蝉の声。朝から晩まで同じ声でなく蝉たちにも彼は虚無の臭いをかぐ。

(これが日本なのだ)

とプチジャンは思った。

(二百数十年の間、日本はこの形で続いてきたのだ。世界から孤立して…)

この形で続いてきた日本が今、一寸だけだけれど変わろうとしている。その変り目に彼は日本にやってきたのだ。いや、ひよっとすると、彼はその日本の変化に関係するのかもしれない…

(「探索者」／『女の一生』)

ここでプチジャン神父は「二百数十年の間」「世界から孤立」していた日本の姿と日本の変化への予感を覚えている。こうした日本の鎖国の状況は、プチジャン神父が日本へ来る前に学んだフランシスコ・ザビエル以来の日本宣教の歴史や当時の西洋諸国の植民地支配と教会との関わりといった歴史認識を踏まえたものであると言える。一方で、『坂の上の雲』も語り手はグローバルな視点に立ち、明治の日本を「小さな国」と捉えている。

まことに小さな国が、開化期をむかえようとしている。

(傍線部引用者／「春や昔」／『坂の上の雲』)

小さな。

たとえば、明治初年の日本ほど小さな国はなかったであろう。産業といえば農業しかなく、人材といえば三百年の読書階級であった旧士族しかなかった。

この小さな、世界の片田舎のような国が、はじめてヨーロッパ文明と血みどろの対決をしたのが、日露戦争である。

(傍線部引用者／「真之」／『坂の上の雲』)

この「小さな国」という認識は当時の世界情勢から見るときわめて正確なものである。『坂の上の雲』は、その「小さな国」が日露戦争でどのようにして「大きな国」であるロシアと対等に戦ったのかという問題を三人の主人公を通して描いたものだからである。

さらに、「(三)多元的な視点」の問題もある。先に述べたように『女の一生』は『王国への道』や『侍』のように二元的な視点が交互に切り替わり同時並行で進行する。最初はキクを中心とした視点とプチジャン神父を中心とした視点が交互に描かれるが、浦上四番崩れが始まると、長崎の山崎楼にいるキクを中心とした視点と津和野にい

る清吉たちを中心とした視点に替わっていく。いずれにせよ二元的視点であるという点は変わらない。さらに詳細に見て行くと、キクとミツ、プチジャン神父とフェーレ神父、清吉と伊藤清右衛門といった対照的な人物の個別の視点も合わさり、多層的な視点が絡み合うことで「歴史群像」が描かれていくのである。対する『坂の上の雲』は正岡子規、秋山好古、真之の三人を中心として、それぞれが文学、陸軍、海軍といった異なる場所で奮闘する姿が描かれている。その際に高橋是清、夏目漱石、広瀬中佐、東郷元帥、乃木將軍といった著名人も関連して描くことで「歴史群像」を垣間見せている。

最後に、「(四)〈歴史〉愛好者としての「語り」の問題がある。『女の一生』は遠藤の「心の故郷である長崎への恩返しのもりで書いた作品」¹⁾であった。同様に『坂の上の雲』は司馬遼太郎の正岡子規への愛着が書かせたものであった。²⁾ いずれも長崎や松山というトポスや歴史がモチーフとなっていることは言うまでもない。そうした愛着の中で、ストーリーの本筋から外れることであったも書かざるを得ない事象について、両作家は同じ「余

談」という言葉をつかって説明を加えている。

余談だが、この死亡記録をみると死亡者は女より男のほうが二倍ちかくも多い。即ち女十二名にたいして男は二十二名である。そのうち圧倒的に多いのはやはり年寄りで五十歳以上が十二名だが、それに続いて二、三十歳代の者が七人も死んでいるのは、この年齢の者が人数も多く集中的に責苦を受けたためかもしれない。

(傍線部引用者)／「伊藤という男」／『女の一生』
余談ながら、私は日露戦争というものをこの物語のある時期から書こうとしている。／この兄弟がいなければ日本はどうなっていたかわからないが、そのくせこの兄弟が、どちらも本来が軍人志願でなく、いかにも明治初年の日本の事情から世に出てゆくあたりに、いまのところ筆者はかきりない関心をもっている。

(傍線部引用者)／「真之」／『坂の上の雲』
両作家ともに綿密な資料収集や取材旅行を通して作品

を描いている。そのために、ストーリーに収まりきれない歴史的事実やエピソードが数多くあり、「余談」としてでも書きたいという作家の事情が生まれることになる。また、先に述べたように新聞小説であるため多くの読者を想定する必要もあった。ここに〈歴史〉に対する強い愛着を垣間見ることが出来る。

そもそも遠藤周作と司馬遼太郎は同じ一九二三（大正十二）年に生れ、同じ一九九六（平成八）年に没した。同世代というばかりでなく全く同じ時代を生きた同級生である。この世代は「戦中派」と呼ばれる。例えば遠藤は、『女の一生 第二部サチ子の場合』の「あとがき」で、同世代である「戦中派」に対する親近感を表明している。

電車のなか、バスのなか、あるいは駅前で、私は自分と同じ年頃の主婦を見るたびに何とも言えぬ親近感を急に感ずることがある。

その親近感自分たちが同世代であり、共におなじ歴史を生きてきたのだという事実から生れている。

あのくるしかった大きな戦争を生きぬき、あの変動

の戦後をどうにか経てきた―それが我々の世代なのだ、そうしたムツカしいことではなく、

「おたがい、よく生き残りましたね」

という率直な気持なのかもしれない。

おたがい、よく、生き残れた―しかしこの気持の背後には、もっと複雑な感情がある。つまり自分は生き残ったが、いとしい者、愛した者、親しかった者を戦争や戦後で失ったという悲しみや苦しみがかかっているのだ。

（傍線部引用者／「あとがき」／『女の一生 二部・サチ子の場合』朝日新聞社、一九八三・昭和五十七年三月）

ここには戦争に翻弄され愛する者を失ったサチ子の人を描いた『女の一生 第二部サチ子の場合』のモチーフが隠されていると言えよう。また、この同世代の女性に対する親近感、同世代の司馬遼太郎に対しても同様であったことだろう。しかも、遠藤と司馬遼太郎の二人には〈歴史〉を愛好するという同じ趣味があり、「歴史小説」を描く同志でもあった。そのせい、遠藤が盛ん

に「歴史小説」を描いていた一九七〇年代には、二人は京都で一緒に正月を過ごすことを数年にわたって行ったこともあった。この時の交流が遠藤の〈歴史〉に対する姿勢や「歴史小説」にも影響を与えたことは間違いないだろうし、その一端を『女の一生』に見ることができ。

以上のように、『女の一生』と『坂の上の雲』という一見何の関係も無いように見える作品であっても、実質的な四つの共通点があり、深いところで繋がっていることがわかる。

三、長崎というトポス

拙稿で指摘したが、遠藤文学において作品舞台は単なる場所ではなくその土地の歴史、風俗も含めた特別な文学空間であった。「長崎への恩返し」のつもりで書いた^⑧という『女の一生』においても長崎が単なる作品舞台だけではなく歴史、風物を含めたトポスとして描かれていることは明らかであろう。そこで、長崎の歴史と風物を作品で確認して行きたい。

まずは前者の長崎の歴史。『女の一生』は「浦上村の

歴史^⑨」を描いたという指摘があるように、浦上四番崩れが中心に描かれている。

作品は、浦上村馬込郷の農家に生まれた従姉妹のミツとキクが登場する所から始まる。ミツは五歳、キクは六歳であるが、後の記述から逆算すると、一八五五年頃の話となる。浦上三番崩れが一八五六年なので、おおよそこのあたりから物語が始まる。一八七三年の明治六年二月に禁制高札が撤去され、清吉たちが配流の地・津和野から浦上へ戻り、浦上四番崩れの事件が収束を迎えるところで終わっている。エピソードでは大正二年の晩夏に清吉と伊藤清左衛門が津和野で再会し、キクの一生が語られるが、中心となるのはあくまでも浦上四番崩れをめぐる約二十年間であった。

そのほかにも長崎の殉教の歴史がところどころで語られる。例えば二十六聖人殉教の地として有名な西坂についてはミツとキクが浦上から長崎へ行く途上にあらわれている。

晴れた空に鶯が鳴いている。長いこと歩いて浜に
そった街道が坂になった。その坂は西坂と言って、

むかし仕置場だった場所である。この仕置場で聖徳寺の住職が嫌う切支丹邪宗の徒が何十人も処刑されたのだ。

〔長崎〕／『女の一生』

さらに、雲仙での拷問や殉教についてもフューレ神父を通して語られる。フューレ神父は長崎での切支丹探索をなかなか諦めないプチジャン神父をさとすために雲仙に連れて行き、迫害の激しさについて語る。

「日本の切支丹たちのうち信仰を捨てぬ者は……ここで、この熱湯につけられた。足の肉は一瞬でなくなり、引きあげられた時は骨しか残っていなかった。ベルナル。わかるかね。足は白い骨しか残っていなかったんだよ……」

／「ベルナル。長崎の基督教信者たちはね、これほどの拷問まで受けたんだよ。火あぶり、水責め、そしてこの雲仙での熱湯づけ。……さあ、眼を大きくあけて君の足もとを見たまえ」

〔希望の日〕／『女の一生』

ここでプチジャン神父は日本での切支丹迫害の凄まじ

さを実感する。既に遠藤は雲仙の殉教の様子について、『雲仙』や『沈黙』で切支丹資料を使って描いたことがあるが、『女の一生』ではそうした資料の引用ではなく、フューレ神父が直接語るところに臨場感がある。また、読者にとっても迫害の残酷さをより実感しやすくなっている。こうして日本から切支丹がいなくなった理由を実感したプチジャン神父ではあったが、数日後に切支丹信徒を発見する奇跡の現場に立ち会うことになる。その感激を次のように伝えている。

（ごらんなさい、この長崎に彼等はいたのです。存在したのです。なんとという素晴らしい街でしょう）

二百年以上のものすごい迫害とすさまじい圧迫とに日本人の基督教徒は豪雨のなかの一本の木のように耐え、生き残っていたのだ。

（傍線部引用者／「希望の日」／『女の一生』）

プチジャン神父にとって、先に雲仙での迫害の歴史を実感したからこそ、切支丹信徒を発見できた喜びは一層大きくなったことであろう。しかも、わざわざ「この長崎に彼等はいた」と長崎にいたことを強調している点に

大きな意味がある。ここに長崎の歴史を描きたいという意思が如実にあらわれている。

そして、浦上四番崩れが始まると清吉たちが体験した拷問の数々が詳細に描かれる。これらの拷問の様子や役人側の伊藤清右衛門、本藤舜太郎らの心情を描くことは〈第二部・サチ子の場合〉でアウシュビッツのコルベ神父や囚人たちと、看守や所長らの心情を描くことへの伏線となっている。清吉たちは長崎では西役所で取調べと拷問を受け、津和野に流されたあとは三尺牢など烈しい拷問を受けて多数の棄教者や死者を出している。これもまた長崎の歴史なのである。

次に後者の長崎の風物。遠藤文学ではしばしば「弱者」と「日常性」が描かれる。『女の一生』でも「弱者」として棄教した熊蔵や、心に悩みを抱えつつキクの一生を見届けた伊藤清右衛門らが描かれた。そして、「日常性」は、当時の長崎の様々な風物が日常の風景として描かれている。そこで作品に登場する主な風物をまとめると次のようになる。

第一に正月の風物。最初に登場するのは長崎で正月に行われた踏絵である。「馬込郷でもこの踏絵は毎年、正月十二日、庄屋の高谷家で行われた。」（「長崎」／『女の一生』）としている。キクはこの時初めて聖母マリアと対面することになる。『沈黙』でも、踏絵を踏んで棄教したロドリゴが正月に踏絵を踏むたびに過去の辛い記憶を蘇らせていた。どちらも同じ古賀十二郎編『長崎市史 風俗編』（清文堂出版、一九三八・昭和十三年四月）を典拠としている。また、キクが働いていた丸山での正月の風物も描かれる。土竜打ちと柱餅である。土竜打ちについては、「正月が終って十四日になると丸山では土竜打ちといって、子供たちが五、六人一組となって注連縄をたばねた竹を持って家々の門石を叩きながら歌いまわる風習がある。」（「二つの愛」／『女の一生』）としている。柱餅については年末から正月にかけての様子として描かれる。

晦日前の丸山は華やかで忙しい。それぞれの楼では餅つきの支度をして男衆を待つ。（中略）最後の白の餅はまるめて大黒柱にうちつけるのが長崎の習

慣だった。柱餅といって、正月十五日の時、これをあぶって食べるのだ。

〔丸山〕／『女の一生』

第二に春先の風物。キクとミツは節分を過ぎた頃から五島屋での奉公をはじめますが、それに合わせて様々な風物が描かれる。まずは二月の節分の馬込郷の様子である。

この節分には、馬込郷の子供たちは大根で白ネズミを作り、それを盆にのせて明方から「白ネズミの参りました」と口々に叫びながら家々をまわって遊ぶ。長崎の子供たちの風習を真似たものらしいが、小さい時には、キクやミツも友だちとこれをやったものだった。

〔長崎〕／『女の一生』

キクとミツの子供時代を彷彿させる風物であった。この時は二人の門出を祝い、お婆が育った外海の唄であるめでたい豆まき歌を歌ってくれた。二月の節分が過ぎてから、長崎で二人の奉公が始まると、長崎の春先の風物が描かれる。いずれもキクと清吉の二人の関係を深く関わっている。まず、キクが清吉に再会したのは五島屋の

旦那が「七高山巡り」に行く準備に追われた日であった。

この頃に長崎近辺の七つの山を遍路納札する行事で、商家の旦那衆にはこれに参加する者が多かった。

〔長崎〕／『女の一生』

次に、三月になると、街には黄砂が降り、桃の節句があり、凧合戦が行われる。そうした時間の移り変わりの中でキクと清吉の関係も変わって行くのである。二人の関係の変化の予兆として黄砂が降り、長崎に春を告げる。

つちふるー。

大陸から吹いてくる黄塵のことだ。長崎ではその黄塵が春の訪れに少し先がけて襲ってくる。空が褐色ぼく曇って、外の風に巻きこまれると顔にも首にも小さな土埃が吹きつけてくる。だが、それが終ると春。

〔南蛮寺〕／『女の一生』

こうして冬が終わり、春になった。三月三日には桃の節句があり、ミツとキクが奉公を始めてから初めての外出の機会となる。

ミツもキクも待ち遠しかった。三月三日の節句の

日がある。その日は五島屋ではお米さんを除いて、特別にトメとキクとミツとに一日、暇が出る。もっとも外で泊ることは許されない。

〔南蛮寺〕／『女の一生』

馬込に戻りたいというキクを説得してミツは南蛮寺見学を持ちかけ、市次郎に連れていってもらう。この大浦天主堂でキクは清吉を見かけるのである。キクは清吉に嘘を吐かれたことと、清吉が切支丹であるという秘密を知り苦悩する。その苦悩は風合戦の少し後まで続くこととなる。

桃の節句が終わったと思うと、もう間近に三月十日の金比羅さまのお祭りが迫っていた。風あげをやる日である。とかく長崎は遊ぶことと行事の多い街だった。

〔傍線部引用者〕／「南蛮寺」／『女の一生』

そんな浮かない日のなかで春の金比羅さまの祭りがやってきた。三月十日である。

金比羅さまの祭りはいつも長崎の七ヶ町が交代で

当番をする。今はもう衰えたが、ミツやキクがいた頃は長崎の神社仏閣の祭りではもっとも賑わったものの一つだった。

〔傍線部引用者〕／「南蛮寺」／『女の一生』

桃の節句が三月三日なので、風合戦が行われた三月十日まで一週間の開きがある。この一週間はキクにとって長い苦悩の日々であったと言えよう。そんなキクから愛の告白を受けて清吉はキクが自分を深く愛していることを知り、二人は「恋人」の關係へ変わるのである。また、この時の風合戦でプチジャン神父は出島のオランダ商館のオランダ人と対決をしたり、後には風が浦上の信徒たちとの連絡手段となったりと重要な役割をしている。

第三に五月の風物。ペーロン競漕と諏訪神社の祭りである。まずペーロン競漕は五月の最大の行事として紹介される。

長崎と長崎の近郊で五月の最大の行事といえぱペーロンの日である。

この五月の五日と六日、端午の節句の日、馬込郷、竹の久保、稲佐、水ノ浦、鮑ノ浦、西浦、平戸小屋、

瀬の脇などの海岸にちかい村々の若者が、向う鉢巻に三尺をきりっとしめ競漕を行う。おしてそれぞれの村や町の者たちはその日、浜に集まり声のかれるまで声援する。その応援は時には喧嘩をうみ血の雨をふらすことも多かつたほどである。

〔勝負〕／『女の一生』

清吉たちは、長崎全体がペーロン競漕に夢中になることを利用し、見張りが手薄になることを狙ってプチジャン神父を浦上村に招き入れ、洗礼を授けてもらったり、オラシヨを唱えてもらったりした。この時にうまくいきすぎた結果、後の惨劇を招く要因となっている。

次に諏訪神社の祭りである。この祭りは梅雨の季節の到来を告げるものとなっている。

五月の爽やかな日、お諏訪さまのお祭りが始まって、しゃぎりの軽快な響きが街のあちこちで聞えてくる。鯉のぼりがみどりをふくんだ風に流され、粽やくわくわら餅を売り歩く男が寺町の土塀のかけで一休みをしている。そしてあのペーロン競漕が終ると、そろそろ雨がふりはじめる。梅雨の季節がはじ

まるのだった。

〔群像〕／『女の一生』

梅雨の季節の六月十三日に浦上四番崩れが始まる。キクは清吉が逮捕されたショックで五島屋を飛び出しプチジャン神父に助けてもらい、大浦天主堂で働くことになる。また、一人で五島屋に残されたミツのもとに熊蔵があらわれる。キクばかりではなく、ミツにとっても重要な転機であった。

熊蔵は清吉たちの仲間と一緒に牢に入れられたが、心が弱く棄教者となってしまう「弱者」である。村にも帰れず五島屋に駆け込み、ミツのおかげで働くことができた。だが、自分が仲間を裏切ったことや棄教者であることは誰にも打ち明けられず苦しみを抱えたまま暮さざるをえなかった。ミツはそうした「弱者」の熊蔵の悲しみに寄り添い、後には夫婦となり、切支丹となるのである。

第四に六月の風物。長崎の西役所から津和野へ派遣されている伊藤清左衛門が長崎を懐かしむ場面に登場する。

「ああ、早う長崎に戻りたか。長崎では今頃もう清

水寺の祭りたい」

長崎には季節、季節で色々な行事がある。六月に入ると祇園入りと言って、清水寺の千日参りがはじまる。参道にちかい新石灰、今石灰街の路すじは注連と柳できよめられ、家々では鱈や氷餅を作って客に出すのが習わしである。

伊藤清左衛門はそうした長崎の風物をひとつひとつ思いだしては泣きたい気持ちで懐かしんでいた。

〔「恵まれた者と恵まれぬ者」／『女の一生』〕
ここで長崎へ帰りたいと思っているのは伊藤清左衛門だけでなく、清吉たち全員の気持ちでもあるが、清吉たちが帰りたいのは浦上村であって長崎ではない。そのため、長崎出身の伊藤清左衛門を通して「清水寺の千日参り」を思い出させているのである。しかも、伊藤清左衛門は「清水寺の千日参り」以外にも色々な「長崎の風物」を思い出しており、結果的に作者の長崎への愛着の深さを物語っている。

第五に七月の風物。長崎の夏を代表する精霊流しが描かれる。

夏が来た。長崎の夏には凌ぎがたいほど暑い夕暮がある。まったくの無風状態で真夜中になっても寝つかれないくらいだ。

そんなむし暑い夏の夜、精霊舟を流す長崎名物の行事が行われる。七月十四日にあちこちの寺の墓地では菴をしいて酒宴をひらく家族がみえ、ペイシンとよばれる料理に皿の形にこしらえたところてんを食べ、墓前にもそなえるのだが、その翌日の真夜中から大波止のあたりは人の群れでぎっしりと埋まる。それぞれの人が灯をともした精霊舟を海にながす。波にゆれ、波にかくれ、波にただよう無数の灯が何とも言えぬ美しい幻の世界を作りあげる。

〔「恵まれた者と恵まれぬ者」／『女の一生』〕
この時、皆が精霊流しを見に出かけた中、一人店に残ったキクの下に伊藤清左衛門が訪れる。伊藤清左衛門は清吉を助けるためと称しキクにお金を要求する。借金のあてのないキクは唐人相手に体を売ることになる。

以上のように、長崎の風物は、季節の変化だけではなく長崎が色々な行事のある豊かな文化に溢れる街である

ことを示している。しかも、季節ごとの風物が登場人物たちの心情や出来事と密接な関係を持っている。

藤田尚子氏が指摘するようにペーロン競漕と精霊流しという長崎を代表する二つの祭が作品で重要な役割を担っていることは確かである。だが、『女の一生』ではそれ以外にも季節ごとの様々な長崎の風物が描かれることで、登場人物たちの当時の日常生活を彷彿とさせるのである。

四、二項対立の図式

先に述べたように、『女の一生』の先行作品である『王国への道』や『侍』では二人の主人公を配し、それぞれの視点が交差することで話が進行していった。『女の一生』もこの流れにあり、前半ではキクを中心とした視点とプチジャン神父を中心とした視点が交互にあらわれ話が進行した。後半では、プチジャン神父の視点がほとんどなくなる代わりに津和野に流された清吉たちを中心とした視点とキクを中心とした視点が交差してストーリーが進行する。いずれも二項対立が作品構造の中心となっている。しかも、『女の一生』では小野功生氏が指

摘するように視点だけではなく様々な二項対立の図式がある。

『女の一生』の構造のすみずみにまで浸透しているのは二項対立の図式である。例えば、第一部では、清吉と伊藤清左衛門、プチジャン神父と本藤舜太郎、配流の地津和野と山崎楼、キクとミツ、お陽とキク、仙右衛門と熊蔵、本藤と伊藤といった対比が象徴する、信仰とそれに対立する価値、強者と弱者、聖性と穢れなどの二項対立が錯綜して、この作品を重層的構造を持つテクストとしている。

(小野功生「『女の一生』—そのテーマ構造」／『遠藤周作—その文学世界』国研出版、一九九七・平成九年十二月)

ここで小野氏が指摘するように、『女の一生』は二項対立の図式がすみずみにまで浸透しているテクストである。これを踏まえて本章では場所と人物の二項対立の図式を確認していきたい。

まずは場所における二項対立の図式。先に述べたように『女の一生』の作品舞台はトポスであるので、単なる

場所ではなく登場人物とも密接な関係を持っていて、これを前提にグローバルな視点から考えると、キリスト教をめぐる西洋諸国と日本の二項対立が作品の大きな背景となっている。キリスト教を受容した西洋諸国と拒絶している日本とのたかひである。それらは、フランス出身のプチジャン神父と岩倉使節団へ参加した本藤舜太郎に代表される。プチジャン神父はザビエル以来の日本宣教の歴史を学び、当時の西洋諸国が犯した植民地支配の罪悪とそれに加担した教会の過ちも認めており、そうした不幸な歴史を踏まえた上で日本宣教に情熱を燃やしている。本藤舜太郎は岩倉使節団に参加してアメリカに行き、日本の禁教令に対する反対運動の激しさを実感し、浦上の切支丹たちが条約改正の鍵であることを知る。こうしてキリスト教をめぐる西洋諸国と日本とのかけひきの渦中に浦上の切支丹たちが巻き込まれ翻弄されたのである。

日本の中では長崎と浦上村、津和野と長崎の二項対立がある。長崎と浦上村の違いは主にキクの眼を通して語られる。長崎は多くの外国人が行き交い、貿易をはじめ

とする商業が中心の街であり、浦上村は農業が中心の貧しい村である。馬込郷のキクたちにとって長崎は憧れの場所であるのに対し、長崎の人間にとって浦上村は家畜の臭いのせいで「言いようもなくさい村だと思われていた」という。この差は明らかであろう。また、津和野と長崎は、清吉とキクに代表される。津和野は清吉たち浦上の信徒が配流され、三年間拷問を受けた地である。対する長崎の大浦天主堂ではプチジャン神父たちが清吉たちを助けようと奔走しており、丸山の山崎楼ではキクが清吉のために身を犠牲にしていた。そうした二つの地を伊藤清左衛門は往復し、清吉とキクを結び付ける頼りない連絡役となっていたのである。

同じ浦上村でも仏教を信仰する馬込郷と切支丹の中野郷、本原郷の対立がある。馬込郷の者は中野郷や本原郷の者をクロと呼び関わりを避けており、中野郷や本原郷の者も異教徒である馬込郷の者とは結婚することはない。異なる宗教を背景に持つ郷の対立は、ミツの兄市次郎が中野郷の清吉を忌み嫌い、キクに清吉とは結婚できないと告げるところに代表される。

長崎は大きな街だけに多層的な二項対立がある。日本人と外国人、五島屋と山崎楼、アチャさんと呼ばれる唐人と南蛮人、フランス人とオランダ人、大浦天主堂と山崎楼、大浦天主堂と西役所などである。

第一に日本人と外国人。長崎は鎖国下の日本にあって唯一外国人を受け入れた街であり、外国人を大事にする風習ができている。だが風合戦に関しては例外であった。三月十日のお祭りの風合戦で、「この三年一人の若い異人がオランダ商館の屋根でアゴバタをあげ、日本人に戦いを挑んで」「南蛮寺」／『女の一生』きて、誰も勝てないことに長崎の街中の人が怒っていた。

第二に五島屋と山崎楼。五島屋は眼鏡橋の近くにある呉服屋でキクとミツが奉公した店である。店の者の大部分は五島出身者で占められており、キクとミツだけが浦上村出身であった。ここでキクは奉公を最後まで勤め熊蔵と結婚したが、ミツは清吉が浦上四番崩れで捕まったショックで店を飛び出してしまい、しかも身を犠牲にして尽した清吉とは結婚できなかった。

商家の五島屋に対し、山崎楼は遊郭である。店は思案

橋の近くの丸山にある。キクはこの店で下女として働いたが、清吉のためにお金の工面をするため、伊藤清左衛門や唐人相手に体を売ってしまう。対照的なのは山崎楼の売れっ子の芸子衆のお陽である。お陽は愛する本藤舜太郎に身受けされ、「後に舜太郎の妻となり鹿鳴館の花の一人」とまで言われた。キクが愛する清吉と結婚出来ずに亡くなったこととは明らかに異なる。

第三に唐人と南蛮人。唐人は「日本人たちがアチャさんと呼んでいる中国人たちの住居地区」「道遠し」／『女の一生』に住み、南蛮人でもオランダ人は出島のオランダ商館、フランス人のプチジャン神父は大浦天主堂とそれぞれ別の場所に住んでいる。

唐人相手の遊女を意味する「十善寺行き」という蔑称があるように、同じ外国人相手の遊女であってもオランダ人相手の遊女より格が下だったりもする。

第四にフランス人とオランダ人。三月十日の風合戦で出島のオランダ商館の若いオランダ人とフランス人のプチジャン神父は対決した。プチジャン神父は勝負に敗れたが、十字架の印の入った風を揚げられて満足した。

第五に大浦天主堂と山崎楼。大浦天主堂はいうまでもなく聖なる場所である。対する山崎楼は性に関連する場所である。全く正反対の場所であるが、五島屋を飛び出したキクが最初に世話になったのが大浦天主堂であり、次に下女として働いたのが山崎楼であった。キクを通して二つの異なる空間が結びついていくのである。

第六に大浦天主堂と西役所。浦上の信徒をめぐる対立がある。大浦天主堂は信徒を保護する側であり、西役所は信徒を弾圧する側である。大浦天主堂を代表するのがプチジャン神父であり、信徒たちを解放するように大使にかけあったり、聖母にずっと祈りを捧げていた。対する西役所を代表するのが伊藤清左衛門と本藤舜太郎であった。大浦天主堂の動きに常に監視の目を光らせ、時には市次郎をスパイとして送り込ませたりした。浦上四番崩れが始まると拷問にかけ棄教させたり、死なせたりもしている。

このように場所は登場人物と密接な関係の中で多層的な二項対立の図式を構成して、「歴史群像」の世界を描き出しているのである。

次に登場人物の二項対立の図式。場所の関係とも重なるが、人物だけを見ても、様々な二項対立の図式が見られる。そこで、主な登場人物であるキク、プチジャン神父、清吉、伊藤清左衛門をめぐる二項対立をそれぞれ確認したい。

第一にキクをめぐる人々である。ミツとキク、お陽とキク、プチジャン神父とキクといった二項対立がある。

まずミツとキク。二人は同じ浦上村馬込郷に生れた従姉妹で、キクの方が一歳上である。ミツには十歳違いの兄・市次郎がいる。子供の時は「ミツの甘ったれ、キクのお転婆」「ミツとキク」／『女の一生』と呼ばれていた。

ミツは、「年上の話すことを何でも素直に信じる」「(「ミツとキク」／『女の一生』)特徴があり、『わたしが・棄てた・女』のミツと同じように「気の毒な人、あわれな人間を見るとどうしようもない不憫さかられる」優しさを持っている。仲間を裏切り棄教した熊蔵の苦しみに寄り添い、後には熊蔵と結婚し切支丹となった。

対するキクは、子供の頃は「活発で、おしゃべりで、はしっこくて」、「自分が美しい女の子でありたいと思っていた」(「ミツとキク」／『女の一生』)。十六歳の時に清吉に恋をして身を犠牲にして頑張ったが清吉と結婚することはできなかった。清吉にメダイユをもらったり、大浦天主堂で下女として働いたり、聖母とは何度も向き合ったが切支丹となることもなかった。ミツとは明らかに対照的である。

次にお陽とキク。先にも述べたが、二人は同じ時期丸山の山崎楼で働いたが、全く正反対のことが起きている。お陽は山崎楼で芸子衆として働いていたが、本藤舜太郎の妻となり幸せを掴んだ。明治の新政府の中で出世する本藤舜太郎に伴われ、後には鹿鳴館の花と呼ばれている。対するキクは、山崎楼で下女として働いていたが、愛する清吉のためにお金を工面するため伊藤清左衛門や中国人相手に体を売り、無理がたたって結核で死んでしまう。最後にプチジャン神父とキク。『女の一生』では二回だけ大浦天主堂の聖母像が沈黙を破る。この時、聖母の声を聞くのがプチジャン神父とキクである。ただし聖母

像の様子は対照的である。

前者のプチジャン神父は浦上の信徒を発見したのもつかの間、役所の監視の眼がすみずみに及んでいることを知り、困り果ててしまう。その時聖母が初めて沈黙を破る。

(ハタがあるではありませんか)

プチジャンは聖母の清らかな声を聞いたように思った。
「ハタ？」

(あなたは習ったでしょう、凧のあげかたを。今、長崎は凧あげの季節です。あなたが凧をあげても、奉行所はそれほど疑いませんよ。凧を：お使いなさい)

子供に教えさとするような聖母の声をプチジャンはたしかに聴いた…。

(傍線部引用者／「暗闘」／『女の一生』)
プチジャン神父は、いわば啓示のように聖母の声を聞いて、浦上の信徒たちとの連絡手段として凧を利用することを思いつく。重要なのはプチジャン神父が聖母の声

を「聞いたように思った」点にある。下手をするとプチジャン神父の思いすこしになるかもしれない危険性も孕んでいるからである。対するキクの場合は、プチジャン神父の時とは異なり聖母が激しい動きを見せる。

この時聖母の大きな眼にキクと同じように白い泪がいっぱいにあふれた。あふれた泪は頬を伝わりその衣をぬらした。彼女はうつ伏して動かなくなったキクのために、一人の男を愛し愛しぬいたこの女のために、おのれの体をよこしてまでも恋人に尽きつたキクのために今、泣いていた。／キクのその叫びを聖母は、はつきりと聞いた。

聖母像は大きな眼に泪をためたまま、強く強くうなずいた。／悲しみと辛さとをこめたキクの訴えには聖母は泣きながら烈しく首をふった。／（いらっしやい、安心して。わたくしと一緒に…）

（傍線部引用者／「雪。そして聖母」／『女の一生』）
病気が重く力尽きて動けなくなったキクに対し、聖母は「白い泪」を流したり、キクの叫びを聞き、眼に泪をためたまま「強く強くうなず」いたり、キクの訴えに

「烈しく首をふった」りする。プチジャン神父の時とは明らかに異なる。

第二にプチジャン神父をめぐる人々である。ギラン中尉とプチジャン神父、フューレ神父とプチジャン神父、オランダ人とプチジャン神父といった二項対立がある。

まずギラン中尉とプチジャン神父。二人は同じ船に乗り長崎へやってくる。ギラン中尉は同僚の士官から聞いた長崎のゲイシャのことで頭がいっぱいだった。対するプチジャン神父は酔っ払いの中国人から聞いた日本にまだ信徒が残っているという不確定な情報をもとに信徒を捜し出すことで頭がいっぱいだった。二人が求めていたものは全く違っていたのである。

次にフューレ神父とプチジャン神父。フューレ神父は二百数十年に及ぶ徹底的な切支丹弾圧の結果日本にはもう一人も残っていないと諦めて、信徒を捜すことよりも教会建設に熱心だった。対するプチジャン神父は教会建設よりも信徒を捜し出すことの方が熱心だった。フューレ神父が長崎を去った後、プチジャン神父は信徒発見の奇跡の現場に立ち会うことができた。プチジャン神父の

方が正しかったのである。

最後にオランダ人とプチジャン神父。三月十日の風合戦で対決をするが、新教の国であるオランダとカトリックのフランス、スペイン、ポルトガルは海外貿易をめぐって長い間争って来た歴史がある。オランダ人もプチジャン神父も互いに敵意は持っていないが、貿易をするために長崎へ来て出島のオランダ商館に住んでいるオランダ人と、宣教のために長崎へ来て大浦天主堂に住んでいるフランス人のプチジャン神父とは根本的に異なっている。風合戦でもオランダ人の目的は勝負に勝つことだが、プチジャン神父は十字架のしるしのついた風をあげること

で教会の存在を人々に知らせることが目的であった。

第三に清吉をめぐる人々である。キクと清吉、仙右衛門と清吉、熊蔵と清吉、伊藤清左衛門と清吉といった二項対立がある。

キクと清吉。キクは清吉を一途に愛し、清吉もキクの愛情に応えようとしたが、二人の出身部落は対立する立場にあった。キクの馬込郷は仏教を信仰する部落で、清吉の中野郷は切支丹の部落であった。キクは清吉を愛す

ることで清吉の信ずる切支丹の世界へ足を踏み入れていくのである。

仙右衛門と清吉。二人は浦上四番崩れの時に一緒に捕まったが、仙右衛門だけは棄教することなく信仰を守り通した。この時清吉は棄教してしまうが、信心戻しをした後は最後まで信仰を守り通した。

熊蔵と清吉。この二人も浦上四番崩れの時に一緒に捕まった。熊蔵は真っ先に棄教し、清吉も棄教するが、その後清吉は信心戻しをして津和野で最後まで耐え抜いた。先に逃げ出した熊蔵は部落に戻ることもできず五島屋に逃げるが、そこでミツに助けられ、大浦天主堂へも通うようになる。

伊藤清左衛門と清吉。清吉を含む浦上の信徒たちの一部は津和野に配流され、拷問を受け続けた。中心になって清吉たちに拷問を加えたのが西役所から派遣された伊藤清左衛門であった。伊藤清左衛門はキクが清吉を愛していることを知っているが故にひどい拷問を加えていくが、やがて西洋からの圧力で信徒たちへの拷問が問題になると上司から責任を全て押し付けられ絶望する。その

後、清吉のために身を犠牲にしたキクの死を見たり、プチジャン神父やウツサン神父を通してキリスト教を知り、信徒となる。大正二年には津和野で清吉に全てを話し懺悔をする。二人には拷問の加害者と被害者、キクを愛した男とキクに愛された男という関係があった。

第四に伊藤清左衛門をめぐる人々である。清吉と伊藤清左衛門、本藤舜太郎と伊藤清左衛門という二項対立がある。

清吉と伊藤清左衛門については先に述べたので、本藤舜太郎と伊藤清左衛門の対立について考えたい。二人は同じ長崎の西役所で働いていたが、出世という点では対照的である。伊藤清左衛門は役目に忠実であったものの下級役人であったので上層部に都合よく信徒たちへの拷問の責任をなすりつけられ、出世することなく終った。対する本藤舜太郎は西市役所では通詞として働いていたが、さらに語学の才能を認められ、外務省の役人に昇進し岩倉使節団にも同行を命ぜられた。結婚に関しても、伊藤清左衛門は愛するキクと結ばれることはなかったのに、本藤舜太郎は愛するお陽と結婚できた。お陽は後に

鹿鳴館の花とまで呼ばれている。こうした二人の間には「弱者」と「強者」をはじめとする様々な二項対立の図式がある。次の箇所を確認できる。

この世には運に恵まれた者と運の悪い者がいる。世に出るものと、世に出ることもできず、泥のなかをながく連中がいます。

その二つの違いは伊藤清左衛門と本藤舜太郎との間にはっきりと出た。舜太郎が岩倉公に目をかけられ外務省の役人に昇進したのに、伊藤は津和野と長崎を往復せねばならぬ西役所の下級役人にすぎなかった。

〔恵まれた者と恵まれぬ者〕／『女の一生』
その日、一日、霧のような雨が長崎にふりつづいていた。その雨を見ながら伊藤はこの世には強い者と弱い者、幸運な者と不運な者、華やかな者とみじめな者とが厳としてあることを考えた。

〔恵まれた者と恵まれぬ者〕／『女の一生』
ここにあらわれただけでも「運に恵まれた者と運の悪

い者」「世に出るものと、世に出ることもできず、泥のなかをながく」者、「強い者と弱い者」「幸運な者と不運な者」「華やかな者とみじめな者」と様々な対立がある。『女の一生』の二項対立の図式のなかでも際立っていることは明らかであろう。問題はプチジャンが語る神の視点である。

「だが神さまはそげん本藤さまよりもあなたさまのそのひがんだ心、傷ついた心に入りこもうとされます。神さまは今のような出世欲にもえた本藤さまには興味を持たれんとです。ばってん伊藤さまのその心のほうにひかれとられる」

〔三年目の冬〕／『女の一生』

プチジャン神父が語る神は、出世欲に燃えた本藤舜太郎よりも伊藤清左衛門の「ひがんだ心、傷ついた心」に興味を持つという。武田友寿は『沈黙』に「弱者の復権」という意図を見たが、『女の一生』でも「弱者の復権」をここに見ることができよう。『沈黙』のキチジローが何回も裏切った末に、最後には切支丹屋敷でロドリゴの下にいたように、伊藤清左衛門も後にはプチジャン神父

やウツサン神父の説教を受け入れ信徒となっているのである。神が伊藤清左衛門に興味を持っているというプチジャン神父の言葉は正しかったのである。

以上のように『女の一生』の場所や登場人物は、様々な二項対立が複雑に絡み合い多層的な二項対立の構造を持っている。そして歴史を背景とすることで「歴史群像」を描き出していると言えよう。

注

- (1) 拙稿「遠藤周作の「歴史小説」の一側面―松田毅一との関連をめぐって―」（『遠藤周作研究』第四号、二〇一一・平成二十三年九月）
- (2) 八木義徳・菅野昭正・岡松和夫「読書鼎談」（『文藝』、一九八二・昭和五十七年五月）
- (3) 注(2)に同じ。岡松和夫の発言。
- (4) 遠藤周作「筆間雑話」『女の一生』
- (5) 司馬遼太郎は『坂の上の雲』の「あとがき 一」に小説執筆のきっかけと子規への関心について次のように述べている。

子規について、ふるくから関心があった。

ある年の夏、かれがうまれた伊予松山のかつての士族町をあるいていたとき、子規と秋山真之が小学校から大学予備門までおなじコースを歩いた仲間

あったことに気づき、ただ子規好きのあまり調べてみる気になった。小説にかくつもりはなかった。調べるにつれて妙な気持になった。

(中略)

そういうことを、書く、どれほどの分量のものになるか、いま、予測しにくい。

昭和四十四年三月

(傍線部引用者) / 「あとがき 一」 / 『坂の上の雲』

(6) 遠藤周作は一九二三(大正十二)年三月二十七日生れ、

一九九六(平成八)年九月二十九日没。司馬遼太郎は

一九二三(大正十二年)八月七日生れ、一九九六(平

成八)年二月十二日没。

(7) 拙稿「遠藤周作論」(劇)を生成するトポス」(『昭

和文学研究』第七十二集、二〇一六・平成二十八年三

月)

(8) 注(2)に同じ。

(9) 注(2)に同じ。

(10) 「勝負」の章では、キクは清吉のことを「恋人の清吉」と呼んでいる。

威勢のいいその声を聞くとキクは箒を持って急いで店の前に走り出る。路を掃くのはキクの仕事だがもう冬の朝のように寒くはなく、しかも恋人の清吉とわずかの間だが話ができるのだ。

(傍線部引用者) / 「勝負」 / 『女の一生』

(11) 藤田尚子「遠藤周作『女の一生 一部・キクの場合』

論」執筆背景と長崎風物の一典拠」(『遠藤周作研究』

創刊号、二〇〇八・平成二十年九月)

(12) 武田友寿『遠藤周作の世界』(中央出版社、一九六九・

昭和四十四年十月)